

与那国島・その山がもつ意味

川 平 成 雄

1. 国境の島・与那国島

与那国島は山の島である。山があるからこそ、水があり・田があり・畑があり・牧場があり・祭りがあり、島に住む人たちの生活に潤いをもたせている。

与那国島にとって、山は、どのような意味をもっているのか。山とつながる生産・山とつながる生活、このことを基底におくなかで与那国島の姿をみることにしたい。

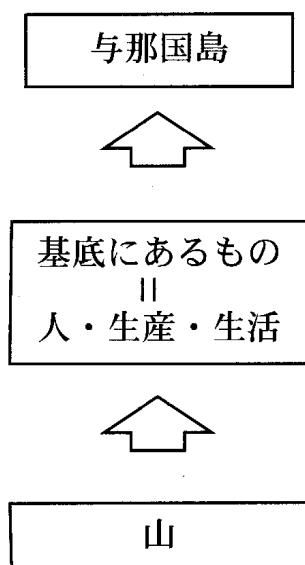
与那国島は、台湾東端まで111km、石垣島まで128km、太平洋を東に、東シナ海を西にして、日本の最西端に位置し、年に1, 2回、晴天の日には台湾の山々が望見できる国境の島である。

海岸線の延長は29.54km、島の東部には宇良部岳（231.2m）を主峰とする宇良部山系が東北東より西南西に連なり、西部には久部良岳（188m）を主峰とする満田原山系が東西に走る。

『絵図』から与那国島の姿をみると、正保4（1647）年4月21日完成の正保国絵図「宮古八重山両島絵図帳」、元禄15（1702）年8月12日の幕府撰元禄国絵図「琉球国絵図八重山嶋外一島絵図」、天保5（1834）年12月の天保国絵図「琉球国 八重山嶋外壱嶋」、「琉球国並諸島図」、明治初期の「八重山群島図」には、与那国島の山が鮮やかに描き出されている（以上の『絵図』は、与那国町史編纂委員会事務局編集『与那国島』町史第一巻、「交響する島宇宙 日本最西端 与那国島の地名と風土」〈与那国町役場 2002年3月〉に収録されている）。また、本山桂川『与那国島図誌』（郷土研究社 大正14年10月）・同『嶋と嶋人』（八弘書店 昭和17年11月）、須藤利一「与那国島紀行」（『旅と伝説』9月号 所収 昭和11年8月10日稿）にも、山の姿が強烈な印象となってスケッチされている。

与那国島の山をめぐる意味をしめすと、図1のとおりである。

図1 与那国島の山をめぐる意味

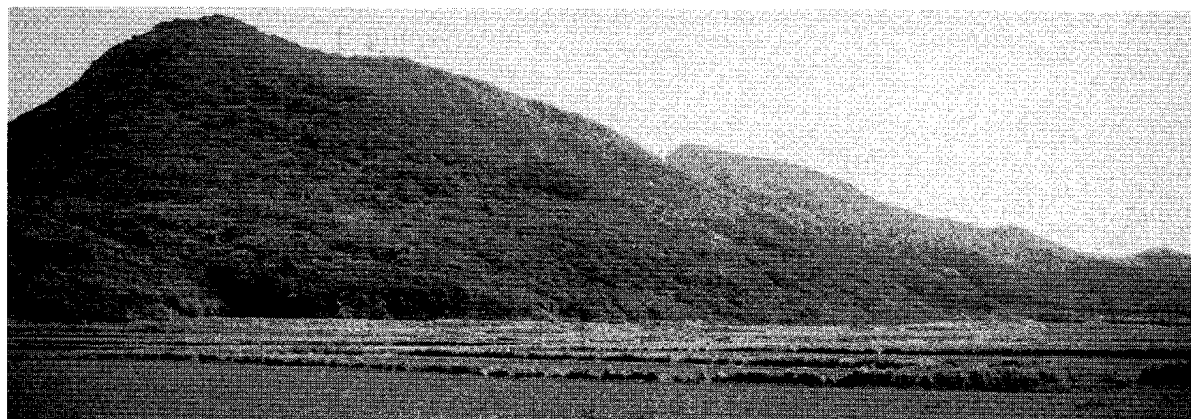


与那国島は、人・生産・生活、そして山が相互に補完しあい島に潤いをもたせている。このなかのひとつでも欠ければ、島の循環が成り立たない。

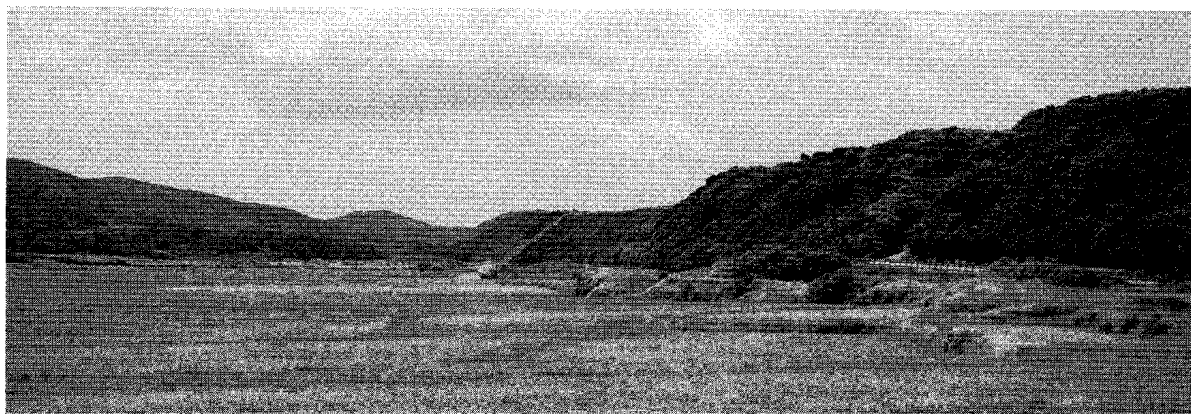
2. 与那国島・山と田と湧き水、いまの姿



祖納集落から字良部岳・田を望む (2000年3月・筆者撮影)



久部良岳に抱かれる田 (2000年3月・筆者撮影)



比川集落からみる山と田の遠景 (2001年3月・筆者撮影)



久部良岳からの久部良集落・遠方には日本最西端の西崎 (2001年3月・筆者撮影)



宇良部岳からの祖納集落・田・畑の遠望 (2001年3月・筆者撮影)



いまでもこんこんと湧き出る田原川の源流 (2001年8月・筆者撮影)

3. 与那国島の山と山をめぐる描写

与那国島の山は、これまでどのようにとらえられていたのでしょうか。ここでは、新聞記事、著書を紐解くなかで、このことを追ってみることにする。

1903（明治36）年、「探険生」は、「八重山事情」のなかで、与那国島の山をめぐる状況をつぎのようにつかまえる。

鬚川の東北に^{オラフ}口良武嶽あり。海面を抜くこと凡そ八、九百尺。島中第一の高山と称す。島内土地肥沃にして耕地多く田地四百町畑地三百町歩原野八百町歩山林亦四十町歩を下らす。其他牧場ありて牛馬の発育甚た良好なるが如し。農産物の重なる者は米を第一とし其産額凡そ年五千俵を下らず。之に次くを粟とす。その産額亦二千俵に達す。其他雜穀及び蕃薯を産すれども重に食用とし米粟は租税に充つるの外島民の所得となるか如し。故に島民の生活は本県内に於て中位以上なり。（『琉球新報』明治36年10月9日付。『石垣市史』新聞集成 第I巻所収。以下、新聞記事の資料は『石垣市史』新聞集成I～IVによる）。

与那国島は土地が肥沃で、田・畑・山があり、おもな農産物は米・粟・甘藷で、島人の生活程度は沖縄県内において中位以上にある、として与那国島の豊かさを説く。当時の与那国島の農民の「智識」は、相当なものであったとつぎのように評価する。

本島（八重山群島—筆者注）農民は他地方農民に比し其知識の程度稍々優れるが如き観なきに非ず。何となれば古来目に一丁字なきものと雖も頗ぶる複雑なる藁算を用ひて貢租公費其他の収支を明かにし又板札なるものによりて各自の負担額等を弁知し殊に与那国島に至りては稍々精密なる象形文字を用ゆるが如き他地方農民間に於て見る事能はざる所なればなり。（『琉球新報』明治37年9月25日付）

八重山地方の農民は、藁算を用いての貢租公課および支払いを計算し、また板札を用いてどの程度の負担があるかを知っていた。しかも、与那国島の人たちは象形文字を用いていろいろなことを表示しており、ほかではみることのできないものである。この与那国島の人たちの「智識」の見事さを物語るのが、家畜の所有者を示す「家畜耳印」であり、屋号を示す「家判」であ

り、農産物など生産と生活、そして度量衡を示す「カイダー字」である（与那国町教育委員会編集・発行『与那国町の家畜耳印・家判・カイダー字・水田名』（平成4年3月）参照）。

明治末期の1910（明治43）年、鎮西老措大は、与那国島を「与那国島の三旬」、「気候」、「龍南の桃源」、「産業」などから描写する。

与那国島は沖縄県八重山列島中の最西端に位する一孤島である。石垣島より約九十海里一葦帯水^(ママ)を隔て、東部台湾を望むことが出来る。蓋し地勢上より云えば寧ろ台湾群島の一部に属すと云ふと不可なかるべく全島海中より聳立突起せる山島であつて宇良部久部良の二岳東西に起伏連亘し凸凹参差鬱蒼たる樹木か其半面を藪ふて居る。島の大きさは東西に三里強南北に一里。周廻は約七里と称せられて居る。（『琉球新報』明治43年2月18日付）

鬱然たる森林は全島を藪ふて終歳凋落の期あるを知らず。空気は開豁にして夏季に至れば涼風絶へず吹き来りて暑氣を一掃し去り仮令酷暑の候と雖ども更に堪え難き程の感しはない。……若し夫れ遠山近山万花点々四時春色を帯び五彩を織るの所無数の珍禽嚙々喃々微妙の音楽を発する。画中の光景に至りては孤客をして宛ら仙郷に入るの感あらしむるのである。名を聞くだけに可懐愛らしき此女護島は実に島全体が自然の公園となつて居る。……險座鼻と称するは島中に矗立する一大怪巖であつて四顧遠近の風景は一眸の中に集まるのである。左手の郊原は牧場で目も醒むる計りの緑草^(ママ)が氈を延べたるように美しい。其美しき郊原には山羊や牛馬が豊草に飽き三々に五々に此処彼処の巖陰や樹陰に悠々と夢を貪り或は友を呼び或は群を為して嬉々として遊び戯むるさまなど歴々として手にも取らるゝようである。瞰下には戸数五百余の祖納村が……
^{なんたはま}波多浜の白砂を縫ふて一段々々と爪先き上りに建並べられたる茅瓦の間を濃艶滴たゝる計りの福樹が点綴して見え隠れする所頗る調和の妙を得て居る。村の^{はづれ}尽頭は穰々たる一面の田甫で四百余町の水田が遠方近方に散在し青波の漾ふ様は島の豊饒を暗示して居る。（『琉球新報』明治43年2月20日付）

元より蕞爾たる一小島に過ぎないが其の陸に海に到る所天産物に豊富なることは事実の証明する所である。既に今日迄現はれつゝある天産物としては海に鰹あり生産としては陸に米あり。……其の未だ全然隠れて漠然ながら未来の有望を語りつゝあるクバ樹の如き又之れに類する将来の開発を期待する生産が甚た少なくない。且つ其の地勢が山を擁するが故に最も牧畜に適して居る。現下放牧しつゝある牛馬山羊の類は殆ど三千に近いが今一步を進めて之れに綿羊と兎とを加へたら怎ふであろうか。由来与那国島は米一作主義の一点張りであるから又夫れだけ米作に対する島民の熱心は非常なものである。一体田地の大部分は天水田であつて水田は僅かに其の一小部分に過ぎない。故に年々八、九月頃より翌年二、三月頃迄の間は降雨毎に五、六頭乃至八、九頭の牛馬を田地へ追い込み地盤を踏み固め以て湛水の淪泄を防がねばならぬ。其の労苦は又実に多とするに足る。斯くて年々耕作しつゝある田地が今は五百町歩に近い。尤も耕作法は未だ極めて幼稚に属し尚ほ旧来の陋法を慣用して殆んど自然の生長に一任するのである。でも年々其の得る所の米産額は実に八千乃至九千俵と計上さるゝのである。元より農家の統計は其の性質多少の違算は免れないとしても先つ如上の計算は大体に於て大差なからう。（『琉球新報』明治43年3月5日付）

毎年那覇口へ輸入すへき米穀は七百俵に上ると云へは面積よりすれば本県唯一の米産地なるべく寧ろ島名もよねの島とするが可なるべし。

（『沖縄毎日新聞』大正2年7月27日付）

鎮西老措大は、与那国島のもつ山々の連なり、山に抱かれての与那国島の悠久な姿を見事なまでに描いており、これ以上に語る術を知らない。また、面積からすれば、与那国島は、沖縄県一の米の産地であり、「島名もよねの島」にしたほうが良いのではないか、との面白い発想をも示す。

大正時代に入って間もなくの1917（大正6）年、八洲（菊池伝市の筆名）は、与那国島がもっている豊さをつぎのように書き留めている。

与那国村は猫大の島嶼と雖も他に見る事の出来得ざる天与の地たり。

島嶼として多くの耕地を有し水田あり燃料あり飲料水ありて何の不足を感することなく且広大無辺の洋海を有す。(『先島新聞』大正6年10月15日付)

与那国島は小さな島であるが、ほかの島ではみることのできないほど「天与の地」であり、くわえて「島嶼として多くの耕地を有し水田あり燃料あり飲料水あり」、何の不足もない島である。このような恵みがもたらされたのも山があるからこそである。

1922(大正11)年、『八重山新報』は、「与那国村の現在と将来」を連載し、「米作」、「甘蔗作」について、つぎのように記述する。

与那国村は天然の地形が米の産地として恵まれ、数百年来米作を農業の本位として来た。今日は既に自給自足の域を脱し貨幣経済の時代に一步を進め、年々少くとも七、八千円の米を輸出して居る。作付反積四百三十八町二反五歩、人口の割合から見ると本郡中尤も水田に富んだ所である。一戸平均六反一畝に当り、年収高約二千石内外を産出してゐる。然し耕作法は数百年来盲目的に伝つて来た原始的遣り方で漸く人力の幾分に畜力を加味した位であるが今尚無肥料の状態である。従つて反当り最高僅かに五斗内外に過ぎない。(『八重山新報』大正11年12月1日付)

与那国村農業の前途に於て最も憂慮すべきは山林の荒廃より来る、水源の枯渇である。数年来増水頻々米作に悪影響を及ぼして居るのは明かに山林の荒廃を語つて居るのである。故に今後糖業や鱈業は燃料問題と相談しなければならぬことになる。従つてこれを解決せざる限り甘蔗作の反別増加等も考へものである。(『八重山新報』大正12年1月11日付)

与那国島は、地形からして米を作るのに適しており、米は農業生産の大宗である。貨幣経済が島に浸透しても、米は換金作目の軸であり、八重山郡最大の水田地帯であるが、耕作はなお原始的な方法で、そのため反当たりの収量は低く粗放経営の域を脱していないと指摘することも忘れない。そして、糖業および鱈業の展開によって山林の荒廃が進んでいることは、憂慮すべきことであり、このことを解決して水源の枯渇に対処しなければならないと説く。なお、1922(大正11)年当時の八重山の米1石の値段は、上米=44円50

錢、中米＝27円25錢、下米＝21円25錢、であった（『沖縄県統計書』物価）。

昭和時代に入ってまもない1929（昭和4）年、『八重山新報』は、「与那国島紀行」を連載し、与那国島の山をめぐる状況を微笑ましいエピソードをくわえて述べる。

祖納字の東南郊外に与那国富士と云はれた宇良部山がある。高サ八百尺其麓を流れる田原川の清流は混々として昔の儘の清さである。此の田原の水清きがために与那国の乙女は美しいのだと土地の人は云つて居るが或はそうかも知れぬ。田原川の流域は与那国で有名な田原田である。面積百二十余町歩古来田原田は与那国の農家にとって祖先伝来の家宝である。田原田を持つて居ると云ふだけで土地の豪家であることを意味すると謂はれてゐる。従つて田原田には相場がない。数年前に耄筆の田が千二百円で売買されたといふ突飛な話がある。久し振に田原の清水を掬んで喉を潤し夕陽名残りを留めて犬座に没する頃頭に芋載せて野良帰りの乙女子はいひ合せた様に路端に芋籠を下し慎ましやかに川縁にかがんで手足を洗ひ膚を清めてゐる。川柳子が「男ならずくに掬まうに水鏡」といつてゐるが、なる程影うつる水に羞らうて下りてたつ事の出来ない乙女等の温順さは実に可憐なものである。（『八重山新報』昭和4年5月15日付）

宇良部岳の麓を流れる田原川の流域は、田原田が広がっている。この田原田は与那国島の農家にとって家宝にも等しい。田原田をもつことは島の豪家であるという。そして、田原川の清流が与那国乙女の美しさと清純可憐さを育てているのではないのか、という。

1930（昭和5）年、竹波（久高将旺の筆名）は、「与那国紀行」のなかで、与那国島にとっての田のもつ意味について述べる。

与那国米の産する田は、祖納字の田原田である。見渡す限り水満々たる一大水田。左手には与那国富士の称あるウラブ岳、右手には昔役人を押し落せしと云ふ犬座鼻の断崖。田原川は此の崖下を流れて水田を灌漑して海に注ぐ。

ウラブ岳尾花招くよ倒さ不二

与那国は稲の二期作もしない。蓬莱米も未だ植えないが、与那国米の在

来種で結構口自給自足して居る。酒醸用の碎米を移入に仰いで居るのみである。(『先島朝日新聞』昭和5年12月13日付)

竹波の与那国島の田についての描写は、見事というほかはない。田があるのは宇良部岳があるからであり、「ウラブ岳のススキの穂が我を招いている。我がもとに引き寄せたいものだ」とたたえる。

1936(昭和11)年、数学史資料の渉獵に与那国島を訪れた須藤利一は、与那国島の水の豊かさをつぎのように述べる。

八重山離島の黒島や新城等に比較したら、此島の水量は断然豊富で、飲料水に天水を貯めてある事も行はれてあるが、塩分の非常に少ない井戸水もある。田原川が宇良部山麓を離れて租納平野に注ぐ所に、五六坪のよどみが出来てゐて老若男女は云はずもがな、牛も馬も、その清冽な水に浴するを楽しむのである。(須藤利一『南島覚書』〈復刻版〉第一書房 1982年 37頁)

ここに、興味をひく資料がある。1941(昭和16)年3月、海軍省水路部が刊行した『台湾南西諸島水路誌』である。『水路誌』であるからこそ、与那国島をつぎのようにとらえる。

与那国島 西表島ノ西方約36哩ニ在ル南西諸島中ノ最西端ナリ。東西ノ長サ約6哩、幅約2哩、島岩珊瑚礁沿布ス ◎東西ニ各一山脈アリ、島頂ハ東脈中ニ在ル宇良部岳ニシテ高サ232米、両脈共ニ樹木繁茂シ其ノ中間ハ稍平低ニシテ耕地多ク南北ニ通ズル山道アリ。

島内人口4,609(昭和10年国勢調査)、住民ハ専ラ農業ヲ営メル傍漁業ニ従事シ其ノ大多数ハ租納、島仲、鬚川(ヒナイ)、久部良ノ4村落ニ分住ス ◎米穀ノ移出年額2,000石ニ達スト謂フ又多ク牛、馬、山羊ヲ牧養ス。(134頁)

この『台湾南西諸島水路誌』は、左肩に「書誌第5号」が付されており、「書誌第5号」の「5」は、内部資料であることを意味する「5」である。このことに注目したい。1941年は、第二次大戦勃発の年にあたり、極秘資料である。与那国島が戦争の地への人員・物資輸送にとって重要な島・目安になっていたことを示す資料であるが、当時の与那国島の様子をも描写していて興味深い。

1942（昭和17）年、本山桂川は『嶋と嶋人』を編集する。その意図するところは、つぎの点にあった。

今や、国民の眼は、光栄と希望とに充ちて南方海洋に注がれつゝある。おそらく各方面の踏査と研究とが、次々と新たに企てられ公けにされるであらうが、その時にこそ、本書の意図は一層読者の理解を深めることになるであらうことを、堅く信じて疑はない。

1942年といえば、第二次大戦が勃発して2年後の年にあたり、中央政府と軍部の目は、南方進出に向いていた時期にあたる。

『嶋と嶋人』のなかで、南方島嶼の研究者であった九州帝國大学の江崎悌三は、与那国島の山についてつぎのようにいう。

島の概観から眺めるのには先づ島の最高峰^{うらぶ}宇良部岳に登ることである。一見富士山の形をした山で「与那国富士」の別名がある。……租納から裏の田圃道を進むとすぐにこの山の裾に出る。途中夕立に遭つて避難した時、フト前の小川を見ると鮒やテナガエビの大きなのがある。この島の鮒は特別に変つたものださうである。山の登攀は容易で、下半には笹が生ひ繁り、これに無数の淡い色のバツタが止つてゐて、多くは一葉を止めぬ程に喰ひ盡して居り、人が近づくと雲霞の如く飛び立つ、誠に壯観である。中腹から上は灌木や常緑の小喬木が生ひ繁り、砂礫や岩塊の間を真直に道をつけてあるので、相当に急峻である。頂上は僅かに平になつてゐて、ここに三角点があり、その北半は開いてゐて、見事な眺望である。美しいスヂグロカバマダラといふ蝶が群飛してゐる。西方には久部良岳が見えるが島の西端はこれに隠れている。（本山桂川『嶋と嶋人』八弘書店 昭和17年 71頁）

与那国島に生れ、育ち、生活していた池間榮三は、「与那国島の地誌」（『与那国の歴史』〈池間苗、1959年〉所収）のなかで、与那国島の原風景をつぎのように活写する。

島内は丘陵勝ちで樹木が多い。従つて谷川が多い。祖納部落の前方に宇良部岳（ウラブタギ）と称する標高二三一メートルの山がある。その容姿が富士山に似ているので、別名与那国富士の称がある。その麓を流れる谷川が合して田原川（タブルガ）となり、祖納部落の前方を流れて

波多港に注いでいる。田原川の流域は、その名の示す通り全部田圃である。

宇良部岳の背面、即ち南面は、宇良部岳を要に扇形に拡がった森林地帯であって、その縁辺は海岸に達している。この山麓の新川崎寄りにウブンドと称する深山がある。宇良部岳から北東へ展開している丘陵の間に帆安（ندان）田原がある。帆安は旧村トナンバラ村のあった所で、伝説に富む霊地である。帆安田原の北側は屋手久（ダテグ）の丘陵が東西へ走って、その東端は東崎に続いている。……

久部良部落の東南方に久部良岳（クブラダギ）と称する山岳がある。その連山が東走して、比川部落の後方及び旧島仲部落の前方に至っているが、全山蒲葵（ビロウ、俗にクバという）樹におおわれて亜熱帯地の景色を呈している。又、ほとんどの海岸地帯が牧場であり、その牧場内に繁茂している蘇鉄とアダン林は南国の情緒を豊かにしている。（2～4頁）

また、安溪遊地は、与那国島を訪れ、その調査結果を「与那国島農民の生活」（渡部忠世・生田滋編『南島の稲作文化—与那国島を中心に—』（法政大学出版局 1984年）所収）としてまとめている。このなかで「山林《ダマ》について」の興味深い聞き取り調査を報告している。

毎日の薪《てイムヌ》を取りに《ムラ》に近い山の麓《ダマバタ》へ行った。小学校の生徒がもっぱらこの仕事をやらされた。畑の周辺のじゃまな木も薪にした。与那国の山には茅葺きの家の建材になるくらいの太い樹木が生い茂っていたのだが、大正初めの丑年の大きな台風でみな折れてしまった。生木を刈り出す山《キーヤマ》も、今では畑小屋の柱ぐらいにしかない木ばかり生えている。真っ直ぐな木は山奥《ダマヌスグ》にいかないと手に入らなかった。しかし、瓦葺きの家《カラダ》に使う上等の建材は、多くの場合、西表島にいて伐ってきたり、人から買ったりした……。家を建てるには大量の竹材が必要で、山の中の自分の竹藪《タギヤマ》や借地契約した村有地から切り出した。ザルを作るためのホウライチク《ンダダギ》を山の中に植える人もあった……。屋根や床の竹を編むトウツルモドキ《ダマイとり》は与那国の山のいた

る所にある。ビロウ《クバ》ばかりが生えている《クバヤマ》でとった《クバ》の葉を利用した道具はきわめて多い。昔は山を伐り開いた所にイトバショウ《バス》を植えていた。《バス》の繊維は農民が身に着ける着物の原料で、特に在来米を収穫するときは長い芒が刺さりにくい《バス》で織った着物《バスキン》（芭蕉布）を着なければかゆくてたまらなかった。今でも山の中や麓にイトバショウがたくさん残っているが、山の中に生えたものは特に《ダマバス》とって、取れる繊維の腰が強かった……。 (310～311頁)

1941年1月7日から43年7月1日までの2年7カ月、第25代沖縄県知事をつとめた早川元は、『知事日誌』のなかで、皮革不足を補う重要な代用皮としての「クバ」に注目してその製品化を唱えるが、資料として『沖縄新報』1941年6月29日付の「クバ葉柄の皮で靴や鞆を製造 与那国で事業化」についてのつぎの記事を『日誌』に書き記す。

皮革不足を補ふため代用皮革の研究は各方面にわたって行はれ既に数へ切れぬ程の代用品が現はれてゐるが、今度、大阪の南洋増産科学工業所で研究の結果、クバ葉柄根元から皮の代用品が完成され事業化されることになった。クバ葉をとって団扇をつくりその葉柄の部分は薪にする外用途がなかったのであるが、立派な代用皮として利用され時局下の重要資源として登場したわけである。差当りの生産地としては八重山郡与那国島に、二十万ほどのクバがあり一株二十本内外の葉柄がとれるし年々新らしい葉が出てくるので同島だけでも十万円内外の売り上げとならう。これが集荷については県山林会で引受けることとなつてゐるが、他の地方においても数量の多いところから順次採集せしめる方針で山林会でクバの立木調査を開始した。南洋殖産としては既に土居亀次氏が実地踏査をして帰ったが取引価格については一本二、三銭程度とみられ、山林会と引取者との間で近く協定する筈で、これが事業化されるればクバ葉柄の皮で出来た履物や袋鞆類が売出されることとならう。なほこの代用皮は繊維が縦横斜に入り交って天然の強靱なる組織をもつてをり耐久力においても皮以上の強さがあり製品は美術的なものとなるので珍重されよう。(野里洋編『昭和十六年早川元・沖縄県知事日記』ひるぎ社 1992

年 182～183頁)

記事にみられるように、「差当りの生産地としては八重山郡与那国島に、二十万ほどのクバがあり一株二十本内外の葉柄がとれるし年々新しい葉が出てくるので同島だけでも十万円内外の売り上げとならう」、と早川の与那国島のクバ製品化によせる気持がうかがえる。

また、早川は、『日誌』に、『朝日新聞』（鹿児島・沖縄版）1941年7月2日付の「靴、になる久葉樹」の記事をも掲げている。

南島沖縄の野生植物が時代の脚光を浴びて颯爽と登場、科学日本に新しい話題を提供した。亜熱帯産久葉樹は沖縄県下各地に密生してある野生植物であるが、事変勃発後、葉は繊維資材として活用され、たわしに作り年々多量生産してあるところ、このほど東京某科学殖産株式会社の職員が早川知事を訪問、沖縄の久葉樹を全部買受けたいとの交渉が進められた。即ち久葉樹の枝のつけ根三尺位のところはまるで皮革同様強靱であるが、それを利用して同会社では靴、かばんその他種々の皮代用品を製作するのに成功。知事はこの話に対して大変乗り気で国策上結構なことだと早速久葉樹の繁茂した与那国の久葉樹を提供、近く県産久葉樹の代用皮革が大いに活用されることになる。(同前、184頁)

大量の製品化が実現しなかったにしても、与那国のクバが戦争にからめとられていく与那国島の山の姿を垣間見ることができよう。

4. 「木札」と生活・山を守る

山は、水の源である。水は田を潤す。いまでは、沖縄本島でほとんど見られなくなり、周辺離島の伊平屋島、伊是名島、そして石垣島、西表島にわずかに残る田園風景が与那国島にあるのは、山を大切にしているからこそである。

山は、燃料である薪、果物を手に入れることが困難であった頃にはダマンニ（山のみかん）を取る楽しい「場」、食物を得ることのできる「場」、であった。だから与那国島人は、山を深く守っていた。深く守っていたからこそ山を乱すものにたいしては、厳しい罰則を科す。山を守る人がダマカンチ・ダマカンス（山監守）であり、乱すものにたいしては徹底した行為に打って出

る。それが「木札」である。「木札」が科されたなら、罰金の支払いのみならず、家を建てたり・改築したりする際の材木・茅を取ることが許されない。それほどまでに山は与那国島人の生活と密接にかかわっていたのである。

山を守っている与那国島人であったが、ほかの島から与那国島にきて与那国島で「物」を作り・生活し・子供を産み・育てることにたいしては、大きな懐のなかに包み込む。与那国島の山がもつひとつの意味がそこにある。

産後の肥立ちが早くなるように火を燃やす。肥立ちの母親を守るために山に入れば、山監守は許し・とがめない。20日間～30日間を許す。

いまでも、山監守は、祖納集落に二人・久部良集落に一人・比川集落に一人おり、山を守っている。

時を重ね、与那国島は、1958年9月2日付で「与那国町有林野産物払下条例」を定める。この「条例」の主な条項はつぎのものである。

第1条 この条例は与那国町有林野産物に関する事項を定めて森林の保続培養と森林生産力の増進を図り以って郷土の保全と住民経済の発展とに資することを目的としこの条例の定めるところにより町有林産物の払下げをなすものとする。

第6条 林野に関する違反者又は町に納付すべき義務ある納付を怠りたる者には林野産物の払下げを許可しないものとする。
但し林野に関する違反者にして改しゅんの情ありと認めたる場合はこの限りでない。

第7条 林野産物は町の利益と認める時は区域を定めて競争入札に附し最高入札者に払下げるものとする。

第8条 林野産物にして枯損したるもの又は切棄てたる枝葉及び特別表7号より16号までの内自家用に供するものは許可を得ずして採集することができる。

第11条 林野産物の払下げを受けたる者は自己の使用する人夫又は家族の不正行為に関してはその責任を負うものとする。

その後、何度かの改正（改正の条項については、いまのところ見つからない）があり、1964年3月17日付で「与那国町々有林野開拓条例」を制定する。この条例の目的は、「町有林野を開拓し本町蔗作パイン作及びその他農作物等

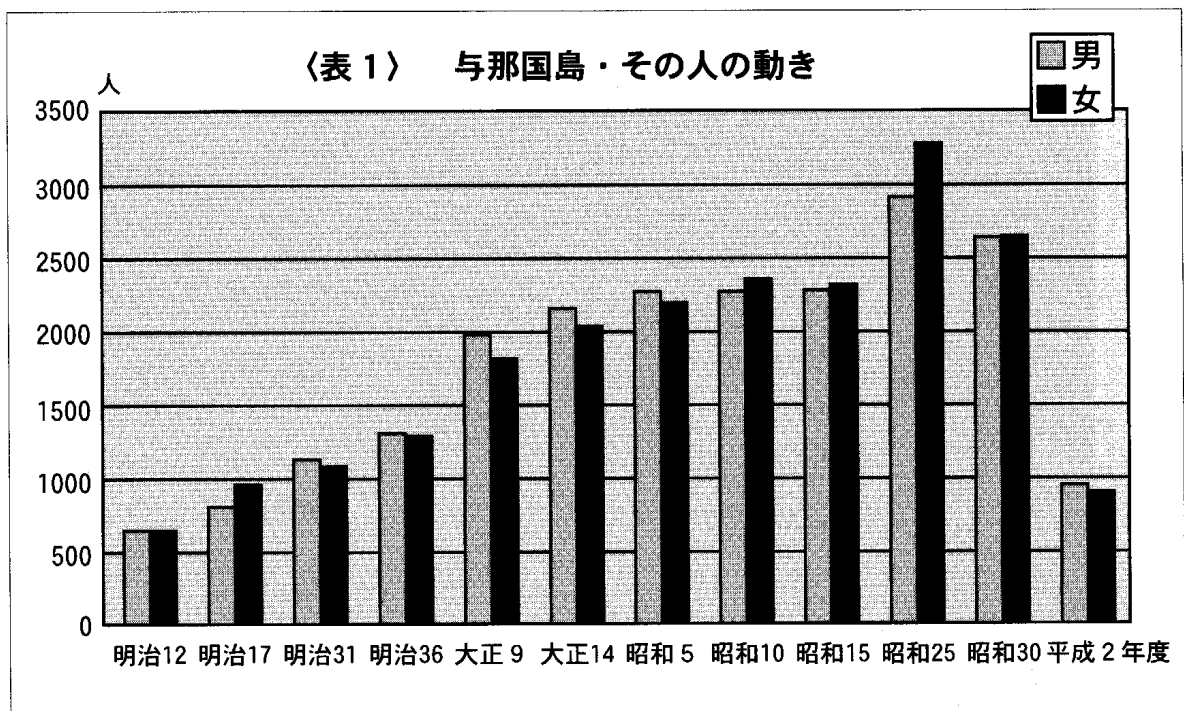
の振興を図りもって本町経済の発展に寄与する」、このことにあった。条例が制定された背景には、日本政府による沖縄の砂糖産業・パイン産業の保護育成策があった。

第4条においては、つぎの範囲を林野開拓から除く。

- 1 田及び普通畑 傾斜15度以上のもの
- 2 飼料畑及び草地 傾斜20度以上のもの
- 3 樹園地 傾斜30度以上のもの
- 4 保安林並にこれに準ずる森林（展示林試験林風致林優良樹林母樹林）
- 5 水源地として利用している集水区域
- 6 森林又は基岩がもろく土壌が軽く土砂の流出が甚だしく崩壊のおそれのある林地

この区域を林野開拓から除く底にあるのは、与那国島の人たちが山こそ田・畑・生活にとって重要なものである、と認識したからにほかならない。

5. 与那国島の人動き、そして生産・生活



	明治12年	明治17年	明治31年	明治36年	大正9年	大正14年
男	670	818	1,139	1,316	1,971	2,139
女	673	962	1,117	1,289	1,831	2,035
合計	1,343	1,780	2,256	2,605	3,802	4,174
	昭和5年	昭和10年	昭和15年	昭和25年	昭和30年	平成12年
	2,259	2,264	2,268	2,907	2,622	957
	2,201	2,345	2,312	3,251	2,637	895
	4,460	4,609	4,580	6,158	5,259	1,852

出所：明治12年は内務省戸籍局『日本全国郡区分人口表』、明治17年は内務省戸籍局『日本全国戸口表』、明治31年は内務省・内閣統計局編『国勢調査以前 日本人口統計集成』、明治36年は内閣統計局編『日本帝国人口静態統計』、大正9・14年、昭和5・10年は『国政調査報告』、昭和15年は『海南時報』昭和16年5月2日付、昭和25年は琉球政府行政主席統計局『琉球統計報告』、昭和30年は琉球政府統計部『臨時国政調査報告』、平成12年は『国勢調査』、より作成。

1879（明治12）年沖縄県設置以降、戦前与那国島の人動きを表1から確認すると、時を重ねるごとに男女人口とも顕著な伸びをみている。それも、第二次大戦後にいたると大幅な増加をみる。沖縄戦によってほとんどの生産の基盤・生活の基盤が破壊され、生活を維持・継続するために、米軍政府の監視の届かない先島、とくに台湾と与那国島との密貿易にひとびとが生活の糧をもとめて集中した結果である。しかしながら、それをつかの間、米軍の監視が厳しくなり、密貿易は衰退し、島から人は出ていき、減少の方向をたどる。

人の動きは以上のような状況であるが、与那国島の人たちの生活の基盤を、表2・表3・表4からみると、「土地整理」が完了した明治36年時点で、田および畑は民有地であり、山林はほとんどが官有地である。「土地整理」以後の大正期と昭和期の動きをみれば、田の面積はおよそ340町～440町水準で推移し、畑はおよそ420町～460町水準で推移している。田の面積と畑の面積が、ある程度のバランスでもって推移するのは、「山」があるからであり、それを裏付けるのが、101町の人工林の存在、708町の天然林の存在、38町の竹林の存在、である。

〈表2〉 与那国島の官有地・民有地面積（明治36年）

単位：町・反

官民別 地目	官有地 887.2	民有地（有祖地） 1702.6
田	—	437.3
畑	—	337.6
山林	721.4	46.7
原野	164.5	832.4

出所：『沖縄県統計書』より作成。

〈表3〉 与那国島の田・畑・山林・原野面積の動き

単位：町・反

年度 地目	田	畑	山林	原野	備考
大正 11	437.4	422.3	—	—	総面積
大正 15	370.5	418.8	—	—	耕作面積
昭和 5	344.9	454.4	—	—	耕作面積
昭和 10	339.5	459.4	—	—	耕作面積
昭和 15	436.8	449.2	766.4	850.3	総面積

出所：『沖縄県統計書』各年度版より作成。

〈表4〉 与那国島・その山の今（平成13年4月1日現在）

林地種類 面・材積	立木地					無立木地	更新困難 地	ギンネム・ ヤシ等
	人工林		天然林		竹林	未立木地		
	針	広	針	広	—	—		
面積 (ha)	46	55	4	704	38	14	151	116
材積 (千m ³)	3	4	0	77	0	0	14	0

出所：沖縄県農林水産部林務課資料より作成。

与那国島は、基本的には、山と田と畑を生産の基盤に置き、生活を営んでいる。では、何を生産し、どのような生活をしていたのか、このことを移出・移入の流れから吟味することにした。

明治期の動きは、表5・表6にあらわれている。移出は、唯一穀物であるが、それは多くが米であると推測される。米を生産しているからこそ、米を移出できるのである。移入は、米穀・泡盛・素麺・油類の4品目である。ここで、疑問が湧く。なぜ、米を生産しているのに、米を移入するのか。この問いに答える鍵となるのが、与那国島への貨幣経済の浸透であるとおもわれる。現金収入を得るために、質の良い米を移出し、現金支出をおさえるために、質のあまりよくない米を移入したのではないのか。米を移出して生産の基盤を得、米・泡盛・素麺・油類を移入して生活の基盤を得る。このことの中に、明治期の与那国島の人たちの姿があるようにおもえる。

〈表5〉 那覇港への移出（明治34年）

品名 数・価	穀物
個数（俵）	1,364
金額（円）	4,092

原注：穀物は三斗入り。

出所：『琉球新報』明治35年9月19日付より作成。

〈表6〉 那覇港からの移入（明治34年）

品名 数・価	米穀（俵）	泡盛（個）	素麺（箱）	油類（個）
個数	360	24	50	28
金額（円）	1,080	240	40	112

原注：米穀並二泡盛塩は一俵一斗入素麺一箱五貫なり。

価格は円未満は除けり。

出所：『琉球新報』明治35年9月15日付より作成。

大正期の動きは、表7・表8に示される。移出品目は1品目から13品目が増え、移入品目は4品目から19品目が増える。移出品目・移入品目ともに増えることは、生産・生活の豊かさと多様性のあらわれを意味する。価格面から、移出・移入の動きをみると、移出品目では、鯉節・鮪節の「節類」が第一位を占め、ついで黒糖・豚・玄米とつづく。移入品目では、石油・軽油・機械油の「油類」が圧倒的で、ついで反布・台湾米とつづく。この移出品目・移入品目の関連のなかに、与那国島のなにを読み取ることができるのか。それは、与那国島における生産のあり方と生活のあり方の内なる変化である。

〈表7〉 移出品 (大正10年)

品名 数・価	玄米 (俵)	黒糖 (挺)	白下糖 (挺)	鯉節 (斤)	鮪節 (斤)	黒次縄 (巴)	澱粉 (斤)
数量	1,300	2,402	980	50,000	5,800	2,800	2,400
金額(円)	7,800	11,716	784	76,500	7,540	350	240

竹 (束)	牛 (頭)	馬 (頭)	豚 (頭)	山羊 (頭)	牛皮 (枚)	合計
60	5	1	550	20	28	—
90	750	200	11,000	140	163	117,723

出所：『八重山新報』大正11年11月21日付より作成。

〈表8〉 移入品 (大正10年)

品名 数・価	台米 (袋)	大豆 (俵)	味噌 (樽)	醤油 (樽)	素麺 (個)	麦酒 (箱)
数量	158	120	20	60	90	40
金額(円)	2,370	1080	260	900	1,080	1,152

種子油(缶)	石油(缶)	軽油(缶)	機械油(缶)	紡績類(個)	反布(個)	鍋釜(個)
100	948	3,200	640	35	20	30
700	4,730	12,800	3,200	1,000	8,000	750
紙類(個)	下駄(個)	板類(坪)	碎米(袋)	薬品(個)	その他	合計
30	2,500	150	170	5	—	—
1,200	1,250	795	2,210	1,000	8,953	54,705

出所：『八重山新報』大正11年11月21日付より作成。

大正期末から昭和初期に目を転じると、表9・表10の動きとなってあらわれる。米の移出が極端に減少し、豚と鯉節の増加をみる。この移出の動きを反映して、米・大豆・材木・茶・麦粉の移入が増える。このことは何を意味するのかであるが、与那国島における食生活の変化と住まいの造りの変化が考えられる。

〈表9〉 移出額の動き

単位：円

品名 \ 年度	大正9	大正11	大正15	昭和3
米	29,500	7,800	4,800	900
牛馬	2,730	950	—	—
豚	3,045	11,000	14,850	27,500
黒糖	30,517	12,500	5,749	2,448
鯉節	86,620	84,040	309,500	486,282
繭	—	—	2,048	1,018
薄荷	—	—	800	1,500
その他	675	893	5,230	5,675
計	153,087	117,183	342,977	525,323

原注：与那国島役場資料に依る。

出所：『八重山新報』昭和5年7月25日付より作成。

〈表10〉 移入額の動き

単位：円

品名 \ 年度	大正9年	大正11年	大正15年	昭和3年
米	4,200	2,370	12,000	23,000
大豆	2,340	1,080	4,125	4,560
材木	800	795	4,000	5,000
茶	720	600	800	1,000
麦粉	280	360	1,400	2,000
素麺	1,200	1,080	1,388	1,080
呉服	3,000	8,000	9,000	4,200
雑貨	3,000	6,000	8,000	40,000
漁船漁具	—	—	—	24,000
石油 マシン油	4,200	12,900	36,600	50,200
その他	18,600	3,868	32,530	32,998
合計	38,340	37,053	117,043	188,108

原注：与那国村役場統計表に依る。

出所：『八重山新報』昭和5年7月25日付より作成。

与那国島と台湾のつながりを表11・表12からみると、与那国島から台湾への移出は、鯉節・鮪節の「節類」が圧倒的な比重を占め、豚・鱻ヒレとつづく。台湾から与那国島への移出は、49品目にのぼり、国境の島・与那国島であるからこそ、このことのもつ意味は深い。

〈表11〉 与那国島から台湾への移出

単位：円

品名 \ 金額	鯉節	鮪節	鱻ヒレ	豚	その他	合計
金額	118,855	27,336	200	14,214	1,818	162,243

出所：『八重山新報』昭和8年5月15日付より作成。

〈表12〉 台湾から与那国島への移出

単位：円

品名 金額	台湾米	白米	碎米	台湾糯米	大豆	落花生
金額	13,750	75	7,920	980	9,000	120

果実	ママ 更目糖	ビール	清涼飲料	醤油	酢	味噌
135	216	1,045	110	70	24	144

缶詰	ミルク	千切大根	菓子類	麦粉	古着	時計
356	300	273	200	1,591	400	120

レコード	洋傘	支那傘	家具用品	石油	揮発油	機械油
45	140	120	1,200	1,460	70	29,300

その他油類	ガラス製品	金物類	漁船用具	椅子	セメント	ローソク
750	180	1,700	8,500	60	2,100	120

マッチ	石鹼	小間物	荒物	塗料	塩魚	板
322	108	960	1,560	500	155	175

材料	図書	印刷物	文具類	和紙	洋紙	清酒
640	600	100	500	80	60	42

医療器械	器具用ポロ	カーバイト	工業用薬品	その他	合計
300	168	490	300	1,820	108,355

出所：『八重山新報』昭和8年5月15日付より作成。

与那国島のなかで、ものを作り・生活を営み、そして祭りを営む、底にあるのは、「山」があるからである。この「山」のもつ意味を深くとらえ、「山」を慈しみ、育て、残すのは、責務といわなければならない。与那国島の「山」がもつ意味を追究することなくして、与那国島を追究することはできない。

あるテレビ局が与那国島取材したことがある。番組のなかで、与那国中学校の一生徒がつぎのように答えたことが、今も胸の奥に焼きついて離れない。「世界から与那国島は見えないが、与那国島から世界が見える」と。与那国島に生を受け、与那国島に生まれ、与那国島から羽ばたいていこうとする、この少年の感性を大切にしたい。

(かびら なりお・琉球大学法文学部教授)